

平成28年度版

愛えがお顔



感動ものがたり

「感動のエピソード」
& 「愛顔の写真」

愛媛県

Challenge & Smile

新しい力が、明日をつくる。



心に留まる、伊予銀行のコラムサイト



iyomemo



column

お金のことだけじゃない!?

観光や地域のはなし、配信中♪





未来へ翔ぶ

水樹奈々



愛媛銀行

愛^{えが}顔^おとは？

人と人との助け合い、

支え合いの根底にある「愛」と、

困難にくじけることなく挑戦し、

道が開けた時にこぼれる「笑顔」が

結ばれて生まれた言葉。

愛媛県は、

「愛^{えが}顔^おあふれる愛媛県」を

目指しています。



知事あいさつ

愛媛県知事 中村 時広

本事業は、愛媛県が提唱する「愛顔」^{えがお}を全国に広く発信し、本県の知名度向上と愛媛ファンの拡大につなげるとともに、「愛顔あふれる愛媛県」の実現に向けた機運醸成を図っていくために実施しており、今回で3回目となります。

今年度は、エピソード部門に、すべての都道府県と8つの国・地域から過去最多の3,659作品、写真部門については、すべての都道府県から5,716作品もの応募をいただきました。厚くお礼申し上げます。

エピソード部門は、芥川賞作家で「千の風になって」の作曲家でもある新井満さん、本県出身の若手俳人のトップランナー神野紗希さん、そして私の3人が最終審査を行い、写真部門では、愛媛が誇る世界的写真家白川義員さんにも御協力いただき、それぞれ受賞作品を選考いたしました。

知事賞をはじめとする各賞に選ばれました皆さん、誠に

おめでとうございます。最終審査に当たり拝見した作品は、どれも「愛顔」と「感動」に満ちた甲乙つけがたい力作ばかりでした。とりわけ、エピソード部門で知事賞に輝いた作品は、卵かけご飯という身近な料理を通して、三世代にわたる家族間の思いが伝わられた、亡き御祖母様への深い感謝の気持ちと御息女への愛情が伝わってくる心温まるものがたりで、審査員一同、胸を打たれました。

今回の受賞作をまとめたこの作品集を多くの方々が御覧になり、全国各地に「愛顔」の輪が大きく広がりますことを切に願っております。

終わりに、応募いただきました方々をはじめ、本事業にお力添えを賜りました関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

目次

「エピソード部門」

「知事賞」	卵かけご飯の愛顔	矢代	稔	(神奈川県)	8
「特別賞」	あの夏の花火	丸山	かおり	(大阪府)	10
「優秀賞」	君がいたから	鴫田	敦	(千葉県)	12
偶然		夏目	裕大	(福島県)	14
私の「小公女」		長田	あいゆ	(福岡県)	16
「入選」	辛い時は空を見る	川田	真美	(愛媛県)	18
	ふるさと	山崎	詩	(愛媛県)	20
	山仲間の笑顔	乾	泰信	(大阪府)	22
	父のプレゼント	山下	さやか	(福井県)	24
	お花ばあちゃんと花つこたち	感王寺美智子	誠	(宮城県)	26
「佳作」	ツルツル路面	鎌田	均	(北海道)	28
	私が耳になる	湯浅	厚子	(大阪府)	29
	覚えていてくれた	古賀	和久	(福岡県)	30
	ぼくらのお母さん	長友	利貞	(熊本県)	31
	痔臓癌	藤原	桃葉	(ブラジル)	32
	おばあさんの手	藤村	まはる	(愛媛県)	33
「十分間のゆとり」		宮崎	陽菜	(愛媛県)	34
	音楽で人と人が「繋がる」とき	竹下	風香	(愛媛県)	35
	弟が教えてくれたこと	升澤	明梨	(愛媛県)	36
	今でも大切な人	奥迫			37

「写真部門」

『一般の部』

「知事賞」

「白川義員特別賞」

「河原学園賞」

「優秀賞」

「入選」

青空高く夢馳せて…

仲よし家族

両手に花!?

発表!わたしたちの今年の目標

えがお満開

あなたと私は101歳差だよ

シャボン玉王子

迷コンビ

まいったね!

おねえちゃんになりたいな

赤ちゃんも同級生

『高校生の部』

「知事賞」

「白川義員特別賞」

「河原学園賞」

『中学生の部』

「知事賞」

「白川義員特別賞」

「河原学園賞」

『小学生の部』

「知事賞」

「白川義員特別賞」

「河原学園賞」

サンフラワースマイル

友だちと

勝負の楽しみ

未来のお天気お姉さん

なつ!

やつ!

おはよう!

あなたが笑えばわたしも笑う

おすしが回ってるよ!

鈴木 緑 (埼玉県)

鈴木 文代 (和歌山県)

大野 久子 (神奈川県)

橋本 直子 (兵庫県)

二川 美香 (愛媛県)

川那 賀一 (岐阜県)

何 ゆり (東京都)

相野 充義 (愛媛県)

雪本 信彰 (高知県)

今井 真紀 (沖縄県)

後藤 有季 (熊本県)

呉 真凜 (山梨県)

宇都宮 伽奈 (愛媛県)

片倉 豪太 (神奈川県)

渡部 葉月 (愛媛県)

田中 康誠 (愛媛県)

平川 明果 (愛媛県)

後藤 堪太 (熊本県)

細井 智弘 (愛知県)

窪田 宜久 (愛媛県)

橋本 さゆき

安永 虹

友澤 翔英

染次 佑奈

袴田 健太

柴田 龍也

鈴木 俊樹

岩井 佳菜子

窪田 宜久 (愛媛県) 45

細井 智弘 (愛知県) 45

45

平川 明果 (愛媛県) 44

田中 康誠 (愛媛県) 44

44

片倉 豪太 (神奈川県) 43

宇都宮 伽奈 (愛媛県) 43

43

後藤 有季 (熊本県) 42

今井 真紀 (沖縄県) 42

42

何 ゆり (東京都) 42

相野 充義 (愛媛県) 42

42

二川 美香 (愛媛県) 41

川那 賀一 (岐阜県) 41

41

鈴木 文代 (和歌山県) 40

大野 久子 (神奈川県) 40

40

「一般の部」

「愛媛県獣医師会賞」夏の始まり
 「愛媛県情報サービス産業協議会賞」愛顔満開
 「愛媛県歯科医師会賞」みんなでポーズ!
 「愛媛県理容生活衛生同業組合賞」仲よし
 「愛媛県経済同友会賞」野菜持っていくかね?
 「愛媛県IT推進協会賞」綱引きで笑顔を!
 「愛媛県広告協会賞」花笑み
 「愛媛県商工会議所連合会賞」視界がひろくくなりました☆

橋本 さゆき 46
 安永 虹 46
 友澤 翔英 46
 染次 佑奈 46
 袴田 健太 46
 柴田 龍也 46
 鈴木 俊樹 46
 岩井 佳菜子 46

広告

私たちは、いつの時代も



 **坊っちゃん列車ミュージアム**
Botchan train Museum

 **いよつ高島屋 大観覧車くるりん**
シーズルゴンドラ 導入

市駅がこれから、もっともっと面白い。

市駅に向かっている。

IYOTETSU

広告

住友グループ

住友金属鉱山株式会社別子事業所
住友化学株式会社愛媛工場
住友重機械工業株式会社愛媛製造所

住友共同電力株式会社
住友林業株式会社新居浜事業所
三井住友建設株式会社四国支店



広告

一人ひとりの、あなたに寄り添い、
地域の笑顔を、明日へつなぐ。

くらしの保障、相談するなら

JA共済

●ご加入にあたりましては、お近くのJA(農協)へお問い合わせください。
■JA共済ホームページアドレス <http://www.ja-kyosai.or.jp>

16481050085

広告



大王製紙の森は
ただいま、約64,000ha!
東京23区とほぼ同じ面積!!

大王製紙株式会社

東京都千代田区富士見二丁目10番2号 TEL 03-6856-7500代
<http://www.daio-paper.co.jp/>

「エピソード部門」

「知事賞」

卵かけご飯の愛顔

矢代 稔（神奈川県）

ひとつ屋根の下で暮らした数年の間に、祖母は幼い私に多くのことを教えてくれた。井戸の水汲み、薪割り、かまど焚き、うどんの打ち方、野菜の世話。圧巻は鶏肉の処理で、祖母は鶏舎の鶏を絞め、毛をむしり、肉を切り分けるところまでを私に手伝わせ、生き物の命を頂く厳粛さと感謝の心を教えてくれた。

当時、私にとって一番のごちそうは、「卵かけご飯」だった。かまどの薪で炊いた熱あつのご飯。生みたての卵に生醤油のこうばしい匂い。そんな卵かけご飯が旨くないはずがない。私はかまどの周りをうろろうろし、「はやく食べよう」と催促ばかりしていた。

茶碗めしを夢中でかっこむ私を、祖母はいつも慈しみ深い愛顔で見守っていた。でも祖母自身は、卵かけご飯に箸をつけようとしなかった。それは太平洋戦争末期、卵をおかずにご飯を食べている時、出征していた

実の息子の戦死の知らせが届いたからだだった。

「いつになったら食べるの」と問う私に、「お前が立派なお父さんになったらかね」と笑う祖母の瞼の奥では、戦死した子と成長した未来の私の姿が重なっていたのかもしれない。

祖母が亡くなって二十年。中三だった私の長女が摂食障害になり、医師に命まで危ない状態だと言われた。私は仕事を休職し、村の家に娘をつれて帰り、井戸水を汲み、野菜を育て、魚を釣り、薪を割ってご飯を炊くという、祖母に教わったとおりの暮らしをはじめた。食事の有難さ、大切さを、何とかして娘にも分かってもらいたかった。秋の虫の音が聞こえはじめる頃、娘はどうとう、あの卵かけご飯に「おいしい」と舌つづみをうち、愛顔を見せてくれた。祖母に命を助けられた。「おばあちゃん。私もいい父親になれたでしょうか？ そろそろ食べて頂けませんか」次の月命日、いつものように仏壇に卵かけご飯を供えると、写真の中の祖母が、幼い私を見守っていた時と同じような愛顔で、かすかに微笑んでくれた。

「特別賞」

あの夏の花火

丸山 かおり（大阪府）

二歳の時に母が亡くなり、以来私はずっと父と二人で暮らしてきた。ただ一人の家族である父との思い出が、実はあまりない。幼い私を抱えての父は、仕事と家事と育児に追われて、心にも時間にも余裕がない生活だった。

父は、いつも眉間にシワを寄せて、近寄りたくない雰囲気を漂わせていた。そんな父に向かって、遊びに連れて行ってほしいとは、怖くて言えなかった。

唯一の思い出は、夏の終わりにした、花火。仕事を終えた父と手をつないで、近所の公園に行った。買ってきた花火に、父が次々に火を点けてくれた。夜空に花火が舞って、綺麗だった。すごく、楽しかった。

気がつけば、残りは線香花火だけになった。最後の一本が消えたら、楽しい時間が終わってしまう。手にした線香花火の火を見つめながら、

私は泣いてしまった。もっと遊びたい、もっと父と、こうしていたい。子供だった私は、その気持ちをうまく言葉にできなかった。

父は、線香花火を手にメソメソと泣く私の頭を優しく撫でながら、

「また、来年な」

とだけ言った。父もまた、気持ちを言葉にするのが下手な人だった。

八年前、余命宣告を受けた父が病室で、

「花火がしたいな」

と言った。外出許可をもらって、車いすで夜の公園に向かった。私が

花火に火を点けて、父が手に持つ。線香花火の火を見つめながら父は、

「また、来年な」

と言って、一本だけ袋に残した。

それが、父と過ごした、最後の夏だった。

遺された一本を見るたびに、あの夏の花火を思い出す。

「優秀賞」

君がいたから

鴫田 敦（千葉県）

初めてママの病気を聞いたとき、パパは頭が真っ白になりました。

「大丈夫ですか？」

お医者さんが声をかけてくれなければ、どこか違う世界に行ってしまうそうでした。

それは突然で、パパと当時四歳になったばかりの君には、あまりにも残酷でした。間もなく病気が、私たちからママを奪ってしまうという話しだったのです。

パパは錯乱していましたが、ママは違っていました。たぶん一週間ほど、一人で恐怖や絶望と闘ったあと、笑顔で言ったのです。

「あの子の成長を見てあげられないかもしれない。でもパパがいてくれてよかった」

ママは、その日から病室で母子手帳の読み方や君の好みなど、日常生

活の様々なことをパパに教えてくれました。それまで子育てを手伝ってこなかったパパは後悔し、ママとかわってあげたいと思いましたが、ママは

「それは駄目よ、親はパパだからね。最後はパパが決めてあげるのよ」
いつもパパは怒られました。

数か月の間、毎日のようにママはパパに君のことばかりを話しました。そして三十歳と二週間の若さで「お星さま」になりました。

ママがいなくなつて、パパの心には大きな穴があいてしまいました。ママは最愛の娘を残してお星さまになったのです。パパには耐えられませんでした。そんなとき、小さい、小さい君は、パパに寄りそつて、その屈託のない笑顔でパパの心を支えてくれました。辛く悲しく、そしてどうすることもできない時期でした。でも、ママが君をパパに残してくれました。パパの心は支えられたのです。

君は間もなく高校生です。成長の過程で、きっと写真でしか覚えていないママを思うでしょう。素敵なママだったよ。

たまには二人で夜空に輝く星を笑顔で眺めてみない。きっと、その一つがママだから。

「優秀賞」

偶然

夏目 裕大（福島県 高校生）

私は数年前、大きな揺れと目に見えない敵によって故郷を離れなくてはならなかった。

故郷には小さな頃から仲の良かった友人がいた。彼女は明るく優しかった。しかし当時は人や町は大混乱で、情報が錯綜し、落ち着いた頃には行方が分からなくなっていった。

避難先での生活に慣れ、新たな環境に希望と不安を交えながら前に進んでいた。その時、私は中学生だった。ある日、同郷の友人との会話の中で彼女の話題になった。私はどこへ行ってしまったのか気になった。たずねてみると友人は彼女の親の実家が九州にあるらしく、そっちに避難したらしいと言った。私は連絡手段も持っていない。情報も少なかつたのであきらめるしかなかった。

時を経て、私は高校生になった。勉強や部活で忙しく毎日を過ごして

いた。毎日同じような生活が続く変化もなく、生きるというよりか、ただ流れゆく時を眺めているだけだった。

そんなある日。私はいつものように携帯をいじり寝そべっていると、新着のメールが一通届いた。送り主を確認してみると、何と彼女からだった。私は目がまん丸になり、あいた口がふさがらなかった。メールでやりとりしているのと、近くに住んでいるらしい。私はいつか会えるといいなど思った。それから、また長い時間が過ぎ、私は高校三年生となり、嫌な受験を控えるようになった。

市内の優秀そうな高校生が集まる合同模試がある。席に着き準備していると、他人のそら似なんてものがあるように、前の前の右斜め前、少し大人びた感じのする彼女そっくりの子がいた。一瞬しか見なかった。私はいつも模試が終わると自己採点の結果と手応えのなさに、肩を落として帰途に就く。しかし、このときは歩いていると、誰かが私の名前を呼ぶ。振り返る。と、女の人がいる。さきほどの彼女が笑顔で立っていた。えっ、と思った。あの彼女だ。するとスウッと憂鬱な強張った緊張感が抜けていき、喜びが湧いてきた。

「優秀賞」

私の「小公女」

長田 あいゆ（福岡県）

私が小学一年の終戦直後に、父はメチールアルコールを飲んで盲目の身となった。そんな父は半狂乱の二年余を経て按摩師の免許を取って働くようになった。しかし父の収入だけでは親子四人が食べて行くことは出来ず、母は男衆に混じって道路工夫や、近所の農作業の手伝いに出て私と弟を育ててくれた。

小学四年の頃の私の日課は、土曜、日曜は盲目の父の手を引いて按摩を依頼する顧客の家に連れて行く事だった。父が施術をしている側で私は宿題をした。また高学年になると学校の図書室で借りた本を次々に読んだ。

悪ガキ共からは「按摩の子」と蔑まれ、友達もいない孤独な私は本が心の親友だった。

しかし、借りた本は返却しなければならぬ。急に読み返したくなっ

でも手にする事は出来ない。自分の本が欲しいと私は心から思ったが、それは到底叶えられない夢だった。

ある日私は学校の帰り道で「二点」と記されたマッチ箱大の紙を拾った。それは、キャラクターを買うとその箱に入っている点数券で、規定の点数を集めて送ると「カバヤ文庫」の中からあなたの好きな本を送る、と書いてあった。「これだ」と私は思った。我が家はとてもお菓子をかう余裕などないので、それからは通学の途中や、父の手を引いて行く道々で目を凝らしてその券を拾い集めた。弟も私が集めている事を知って拾ってくれるようになった。母も協力して集めてくれた。父は母や弟に内緒でそつとお金を握らせてくれて「これでキャラクターを買え。一箱でも何点かの足しになるうが」と言った。勿論断ったが私には家族の心が嬉しく有り難かった。

半年程かかったと思うが、村の秋祭りの日に私が希望した本の「小公女」が送られて来た。表紙に少女が描かれた本物の本だった。

父母と弟の笑顔に囲まれて私はその本を胸にしつかり抱きしめてみんなに「ありがとう・・・」と言いながら思わず涙ぐんでいた。

「入選」

辛い時は空を見る

川田 真美（愛媛県）

私は母一人子一人の家庭に育った。専業主婦が当り前だったあの頃、母は朝早くから夜遅くまで、休む事無く働いてくれたけど、我家の暮らしは豊かとは、程遠かった。

私が小学生の頃、世の中は高度成長期とやらで、友人たちの家は次々とダイニングキッチン、洋間付きのお洒落な建物に変わった。庭には車。そんな中、我家だけが取り残されていた。土間にある台所、風呂無し、井戸あり。まるで昔話にでてくる家、そのものだった。子供心にも友人たちを呼ぶのをためらわれた。ともすれば卑屈になりそうな私の心を救ったのは、母のポジティブな考え方だった。

ある年のお正月。おせち無し、もち無し、訪問者無し。無い無いづくしで新年を迎えた。けれど母は

「お天気が良くて、みんなが元気で最高のお正月じゃね。」

と、ニコニコしながらもち無し雑煮を口に運んでいた。そんな母を見ていると私もいつの間にかしあわせな気持ちになっていた。そんな母の口癖は

「辛い時は下を向いたらいいかん。思い切って空を見上げるんよ。」

子供の頃は理解できなかったけれど、大人になるにつれ、痛いほど身に沁みた。仲間はずれにされた時、片親だからと第一志望の仕事に就けなかった時、仕事で失敗した時……。地面ばかり見ていた自分に気がつき、慌てて空を見上げた。どこまでも続く広い空を見ると、いつの間にか涙が消えた。私の何倍も苦勞した母は、一体、何度空を見上げたのだろう。

今春私は三十年振りに栄養士として働きだした。慣れないパソコン、煩わしい人間関係。ため息と涙が出る前に空を見上げる。青い空。そして、

「大丈夫じゃけんな。」

と、ほほえんでいる母の笑顔が見える。

「入選」

ふるさと

山崎 詩（愛媛県 高校生）

私が六年間通った小学校は、全校生徒が約二十人の小規模校で、一昨年廃校になりました。その思い出いっぱい的小学校で、私はある歌に出会いました。

私が三年生になるまでいらっしゃった教頭先生は、豊かな自然に囲まれたこの小学校と私達のことをすごく大切にしてくださいと優しい先生でした。授業や行事はもちろん休み時間も私達と一緒に過ごしてください、そんな教頭先生がみんな大好きでした。音楽が好きな教頭先生は、ギター演奏が得意で、音楽の授業ではそのギター伴奏に合わせて、たくさんの歌を歌いました。音楽の授業以外にも、教頭先生の歌声を聞いたり、一緒に歌ったりする機会が多く、たくさんの歌に出会い、覚えました。その頃に聴いたり歌ったりしたものは、今でも全部覚えています。

そんな大好きな教頭先生が異動となり、私は離任式でお別れの手紙を読みながら号泣してしまいました。たった三年間でしたが、教頭先生との思い出が余りにも濃く、深いため、私だけでなくみんな泣いていました。そんな中で教頭先生は私達に素敵な贈り物をしてくださいました。それ

は教頭先生が私達や小学校を想って作詞作曲された歌でした。「ふるさと」と題されたその歌を、教頭先生はいつもと同じ「愛顔」で歌ってくださいました。その歌詞の一つ一つは私達の小学校にぴったりで、全校生徒の心に深く響き、刻まれました。この曲は、卒業式で卒業生によって歌い継がれ、今でも私達の心の中で息づいています。

「この学び舎よ、いつまでも」

自然豊かな恵まれた環境で、大好きな教頭先生と過ごした幸せで温かい時間を思い出すこの歌詞が特に好きです。この歌があるお陰で、学校の仲間と思い出を共有でき、今でも私達を繋いでくれています。

私達の学び舎はもうないけれど、教頭先生にこの歌を贈ってもらったことで、「ふるさと」がかけがえのない宝物になりました。

「ふるさと」 作詞・作曲 谷口 晃

1 空の青さに光輝く 桃色の桜道 緑に囲まれて佇む のどかな景色

ゆっくりと 登る坂道 ゆっくりとした時の流れ

あどけない笑顔と響き合う歌声が 小さな校舎に広がる

みんなで歌いみんなで走った みんなで笑いみんなで汗をかいた

みんながいたから 幸せだった この学び舎を忘れない

2 寒さに凍える雪の降る日にも 風が吹き荒れる日も

真夏の日射しの校庭も 霧に煙る町も

真っ直ぐな瞳の中で すべてが優しさに変わる

木のぬくもりと笑顔につつまれて 幸せな時を刻んだ

みんなを感じみんなで学んだ みんなで励ましみんなで喜んだ

みんながいたから 幸せだった このふるさとを忘れない

ここで出会い ここで暮らした みんなが一つになり

たくさんの思い出をくれた このふるさとを忘れない

たくさんの幸せをくれた この学び舎よ いつまでも

「入選」

山仲間の笑顔

乾 泰信（大阪府）

「俺、若年性アルツハイマーやねん。仕事辞める。山に誘ってほしい。」
私は、驚きのあまり言葉が見つからなかった。「しっかり話ができている。
そんなことないのでは。」と返すのがやっとだった。四十年来の山仲間
の彼は五十七才、仕事ではそれなりの地位にあり人望も厚かった。

その夏、四人の山仲間は約束通り、南アルプスの三〇〇〇m級の山に
挑戦した。打ち合わせやトレーニングの時、かなりの物忘れがあったが、
仲間が揃えばなんとかなるだろうと出かけた。

一番シヨクなことは、頂上をめざす朝、出発準備中に「今からどこ
へ行くん？」と聞いたことだ。リーダーが「今日は、塩見岳へ登る。
三〇四六m。天気もいいし、がんばって行こう」と励ました。物忘れを
批判せず丁寧に説明した。アルプスの展望は素晴らしい。空はどこまで
も高く、続く青い峰々、谷を埋める残雪。しかし、彼は自分から話さず、

こちらの話しかけに応える程度だった。表情も乏しく見えた。果たして、彼にとって登山は楽しいことなのか、仲間の口数も次第に減っていった。

テント生活二泊の山を下り、最後の夜は温泉宿で打ち上げ。私は彼に「山は楽しかったのか。楽しそうに見えなかったが」と尋ねた。彼は返答に困った様子だったが、「楽しい。山仲間には、正直に忘れたと言える。だから楽しい。」と答え、若い頃のあどけない笑顔を見せた。この言葉、この笑顔に、私の胸に熱いものがこみ上げてきた。リーダーが「そうや、山仲間や、乾杯！」と音頭をとった。彼もつられるように「乾杯！」と歓声を上げ、素手で涙を拭いた。この山の思い出は、彼の記憶の中に、いつまであるだろうか。明日はもうないかもしれない。

「山仲間には正直に言える」と話した彼の笑顔と涙は、山仲間の絆をいっそう強いものにしてくれた。

「入選」

父のプレゼント

山下 さやか（福井県）

今年の春、父の遺品を整理していると父の作業着から何かがこぼれ落ちました。

「あつ」。拾い上げた瞬間、思わず母と顔を合わせます。それは一粒のひまわりの種でした。3年前、父は胆管癌を患い、余命半年と告げられました。父は自分の身边を少しずつ片付けはじめ、大好きな家庭菜園も断念し、借りていた畑の地面も返しました。父はどんなに仕事が忙しくても、毎朝畑に行き手入れをするのが日課でした。几帳面な父は畑を細かく区分けし、季節ごとにさまざまな野菜を作り、家族を楽しませてくれました。また、夏に必ずしていたこと。それが、畑の一角をひまわりでいっぱいにすることでした。ひまわりは母が大好きな花です。父は、ひまわりを満面の笑みで喜ぶ母が大好きだったのだと思います。毎年「今年も咲いたよ」と、母を畑に連れていく姿は、まるで子供のようでした。

ですから、畑を手放す決断をしたとき、どれだけ心を痛めたことだろうと思います。

ある日、父は自分の部屋にこもり、声を押し殺し、一番の宝物である種が入った袋を一つずつ破って捨てていました。どんなに辛いことがあっても、父は、今まで決して家族の前で涙を見せることなどありませんでした。それが、隣の部屋から聞こえる父のぐっと押し殺して泣く声と、袋を一つずつ破っていく音。部屋から出てきたとき、父はいつもの明るい父で、私はそれがかえって辛く、何も聞いていないふりをするのに一生懸命でした。私の記憶から、あの日のことを忘れたことは決してありません。

あれから3年、私と母の間に落ちた一粒のひまわりの種は、天国の父が母に贈った突然のプレゼントに間違いありません。父が亡くなり、母の笑顔は極端に減りました。母と一緒に庭に植えた種は今、ぐんぐんと成長中で、背丈が伸びる度に母の笑顔も大きくなっていきます。喜んでいる母を見て、父もきつと子供のように嬉しそうにしているに違いありません。

「父さん、素敵なプレゼントありがとうね」。

「入選」

お花ばあちゃんとお花つこたち

感王寺 美智子（宮城県）

キーンコーンカーンコーン

カーンコーンキーンコーン

「いい天気だっちゃ」

「今日は、布団、干すべ」

中学校のグラウンドに建つ仮設住宅の一日は、学校のチャイムと共に、始まる。校舎やグラウンドから聞こえてくる元気な笑い声や、歌声に、励まされながら、私たちは、暮らしているのだ。洗濯物を干しつつ、校舎を見上げれば「こんにちは！」と、教室の窓から、生徒達が、笑顔で手を振ってくれる。

「今日も、しっかり、勉強しろよ」

お隣に住む、お花ばあちゃんが、花に、水をやる手を止め、生徒たちに、声を返す。

「お花ばあちゃんー」窓に、生徒たちが集まる。お花ばあちゃんは、

生徒たちの人気者。仮設住宅で、沢山の花を育てている。自分の部屋の前の周りは勿論、校舎とのフェンス脇など、狭い仮設住宅の、ちよつとした隙間を見つけては、花で埋めてくれている。通る人達も、しばしば足を止め、花に魅入るほどだ。だから、教室の窓から見下ろす仮設は、とてもきれいだそうだ。

「花は、心を明るくしてくれっからさ」

そんなお花ばあちゃんも、やっと、新しい家が建ち、仮設を出て行く日が来た。

「花っこ、頼むね」そう言っ、車に乗り込もうとしたときだった。

♪ばーらが咲いた、ばーらが咲いた、真っ赤なばーらがー♪

突然、校舎から歌声が聞こえてきた。見上げると、いくつもの教室の窓から、沢山の生徒たちが、顔を出して、お花ばあちゃんにむけ、歌っている。お花ばあちゃんは、ぽかんと口を開けて、ポロポロと大粒の涙を、溢した。

「きれいな花っこたちだなあ」

眩しい秋空の下、教室の窓に、いっぱい咲いた生徒たちの笑顔の花。それは、お花ばあちゃんが、咲かせた、気仙沼の未来の花たちだ。

ツルツル路面

鎌田 誠（北海道）

最近の北国の冬は、温暖化の影響なのか一部では豪雪になるが、札幌ではどちらかというと暖冬小雪の傾向です。

雪が少ないことは、生活する者にとってはありがたいのですが、昼間解けた雪が夜になると凍ってしまいます。転倒注意情報が出されるくらいです。吹雪のホワイトアウトも恐ろしいのですが、このツルツル路面も命がけの怖さです。車は止まらない、もの見事に足を取られて転倒して骨折して救急車で運ばれる。骨折しなくても打撲症は当たり前だから、見事にスッテンコロリンを目撃しても大丈夫のようななら、できるだけしらんぷりを装うのが冬の札幌のエチケットの一つです。

お年寄りにとっては、特に交通量の多い横断歩道などは命がけの歩行になる。

冬のある日、病院の帰りなのか、一人の老婆が横断歩道を渡り始めた。おそろおそろ一歩づつ渡り始めたが、道の真ん中で止まってしまった。進めない。信号が瞬き始めていた。おばあちゃんは突然四つん這いになってハイハイで

進み始めた。必死の行為です。

そのとき、一番前に止まっていた車の運転席から一人の若者が飛び出して来て、おばあちゃんを助けようとした。身体を持ち上げようとした瞬間に、足を滑らせて一緒に転んでしまった。信号は、赤に変わった。

しかし、止まっていた車から何人かの人たちが降りてきた。ある人は後続の車に合図し、ある人は二人を抱きかかえた。着ていたジャンパーを脱いで、路面に敷いた人もいました。一人が、滑り止め用の砂袋を持ってきて撒きました。黒い斑点のある横断歩道を一塊の集団が、ゆっくりゆっくりと渡り始めた。無事渡り終えた。おばあちゃんは、ただただ手を合わせてみんなに頭を下げていた。そして、何事もなかったように停車していた車の群れが動き出していった。

昔から、こうして助け合って生きてきたのですね。

「佳作」

私が耳になる

湯浅 均（大阪府）

私は今、東京のど真ん中を走っている。沿道には幾重にも人垣が出来て、ランナーに向けて大声援を送ってくれているが、私にはその殆どが聞こえない。しかしその雰囲気浸れる幸せを感じている。やがて家族が応援してくれているだろう芝公園に近付いた。

私は若い時の事故で難聴になったが、聞き取れない場合は二度聞きするなどして何とか過ごしてきた。しかし、定年を数年後にして、日常生活にも支障が出るようになった。補聴器専門店と相談し、勧められる機器は全て試したけれど、聞こえは悪くなる一方だった。

当然、仕事にも支障をきたし出した。特に会社の仕事仲間迷惑をかけることが多くなり、会社を辞めるべきか一人で悩んでいた。一方、仕事に対する未練もあった。思い詰めると夜も寝られない日が続き、体調も崩した。

ある日、夜中になさされていたところ、妻が「どうしたの。」と聞いてきた。心配をかけたくなって、今まで黙っていた事情を、こらえきれなくなって説明した。

妻は「そうではないかと思っていたのよ。会社は辞めていいのよ。私はあんたが健康でいてくれるのが一番嬉しいのだから。」

そして「今まで苦勞してきたのだから、残りの人生好きなことをしたら。辞めたらこれからは私が耳になってあげるから。」と微笑んだ。

私は途端に今までの苦しみが嘘のように消え、肩の荷が降りた。やはり永年連れ添った伴侶に勝る者はいない。ほどなく私は退職願を提出した。

東京タワーの側を通り過ぎるとひとときわ歓声が高まった気がした。大勢の群衆の中に、妻や娘夫婦、孫の姿を見つけた。皆満面の笑顔で手を振ってくれている。私は近づくにつれて、見慣れた顔の一つ一つが滲んでくるのを止められなかった。

覚えていてくれた

古賀 厚子（福岡県）

出会ったのは一七歳の冬だったよね。高校の通学バスで知り合って早四十年。ずっと私のそばには、優しい瞳で話を聞いてくれるあなたがいてくれた。超がつくほど真面目、節約家でペットボトルにお茶を入れて会社へ行く人。お酒は飲まないし煙草も止めて、楽しみは好きな音楽を聴くことくらい。お小遣いは何に使っているのかしら？と不思議に思っていた。

娘たちが相次いで嫁ぎ、なんだか気が抜けたようになって私。一人でぼつねんとお茶を飲んでいると、二階から降りて来たあなたが見たことがない通帳をぽいっと投げてきた。「なに、これ？」開いてみて、びっくり！結構な金額が貯まっていた。

「もう一度、ブローニユのあの森で写真を撮るんやろう・・・」

「えっ！覚えてくれていたの！」気付いたとたん、涙が溢れて止まらなくなった。

三十三年前の新婚旅行で訪れたバリ、美しく紅葉したブ

ローニユの森で撮った写真が、フィルムの入れ方を失敗して全部だめになっていたこと。デジカメもスマホも無い時代、現像してがっかりする私にかけてくれた言葉。

「もう一度、連れて行くから・・・」

でも、いざ生活が始まると私の両親の介護や子育てに教育費と日々のことに追われ、時間的にも経済的にも余裕が無く、忘れていたわけではないけれど、半分は諦めていたの。

ずっと覚えていてくれて、こっそりコツコツ貯めていてくれたと思うと、ありがたくてありがたすぎて、使うことなどできそうにない。あなたがずっと欲しがっている音の良いスピーカーを買うのに使って下さいな。

色づいたブローニユの森には行かなくても私の心は温かな色でずっと満たされ続けているから・・・

本当に、本当に、ありがとう・・・。

晋ちゃん！

「佳作」

ぼくらのお母さん

長友 和久（熊本県）

ぼくらの担任の先生は「冷血オバサン」。だれが言い出したか分からないが、ぼくらはそう呼んでいた。その名の通り、いつも愛想がなくて笑ったところをだれも見ることがない。何で先生をやっているんだろう……。そう思わずにはいられない人だった。それでも、ぼくらは先生を嫌いなれなかった。授業は分かりやすかったし、受験生であるぼくらの受験指導にも真剣だったからだ。

学級委員だったぼくは、何とかして先生を笑わせようと、妙な使命感に燃えていた。クラスマッチ、合唱コンクール、文化発表会。イベントと名のつくものにはクラス全員で一致団結し、優勝をかつさらっていった。それでも、先生はにこりともしない。手強い。

ぼくらの卒業が近づいていたある日、先輩から先生のことを聞いた。先生は事故で一人息子を亡くしている、とのことだった。子どもを亡くしていることより、先生が一人の母親であったことに、ぼくは一番衝撃を受けた。子どもを亡くしたことが笑わない理由なのか、それは分からない。

この話を聞いたぼくは、クラスのみんなにある提案をした。卒業式の日、最後のホームルーム。さすがの「冷血オバサン」も、表情が少し柔らかい。先生からの話が終わった後、ぼくは立ち上がった。

「先生、これはぼくたちからの感謝の気持ちです。受け取ってください」

ぼくはクラス全員が書いた先生への手紙を手渡す。驚いた表情の先生に、ぼくは続けた。

「先生、今までありがとうございます。先生とぼくたちに血の繋がりはないけれど、深い絆があります。ぼくたちは、先生の子どものようなものです。これから先は、ぼくたちのもう一人の『お母さん』でいてください。そして、ずっとぼくたちを見守っていてください」

先生の顔に涙と笑顔がこぼれた。卒業式の日、ぼくたちは先生の笑顔に、それも最高の笑顔に出会えたのだった。

膵臓癌

藤原 利貞（ブラジル）

二〇一二年九月訪日中に、食欲もなく異常に疲れるので病院で検査を受けることにした。結果は膵臓癌であることが判明した。僕の周りの友人達が心配をして集まってくれて、日本の医療の方がブラジルより優れているだろうから日本で手術をしてから元気になってブラジルへ帰れば良いと勧めてくれた。僕の人生はブラジルで始まったのだから、僕の命はブラジルの医師に任せよう。そう心に決め沢山の友人達に見送られて松山空港を飛び立った。僕が膵臓癌で手術をして入院した事で、従業員を心配させたくなくて、息子から（藤原はタイへ花の視察にまた出掛けた）と伝えさせていた。手術は幸いうまく行って、三週間後に退院する事ができた。退院すると直ぐに農場へ向かい入院中に十キロも痩せてしまっていたが（僕はまだ生きているよ）と車の助手席に乗ったまま手を振りながら顔を見せて回った。手術から二か月半後の農場の従業員とその家族達の総勢一四〇名くらいの忘年会の時、体力も戻ってなく疲れたので早めに帰ろうとしたら、従業員からもう少し居てくだ

さいと頼まれた。不思議に思いながら会場に戻るといきなり写真会が始まった。僕に内緒で家内に頼んで僕の昔の写真を手に入れて編集した藤原ヒストリーから始まり、続いて従業員達からの僕への感謝のメッセージが流れてきた。最後に（藤原ありがとう。従業員一同）と書いた横断幕を前に掲げて全員で撮った写真の額をプレゼントしてくれた。ポルトガル語もほとんど解らないまま、ブラジルと日本の文化の違いに戸惑いながらも、彼らと共に三十六年間必死に花の栽培をして来たけれど、致死率の非常に高い膵臓癌に罹り、人生の最後だと思った時に従業員達が僕のやってきたことを認めてくれた事で、僕の歩んできた人生は間違っていないかったんだと嬉しさが込み上げてきた。手術からもうすぐ四年、奇跡的にまだ元気に生きている。

「佳作」

おばあさんの手

藤村 桃葉（愛媛県 高校生）

私が中学三年だった頃の話です。学校企画で総合的な学習の時間に、福祉体験をする機会がありました。私はその際に、特別養護老人ホーム訪問を選択しました。この経験が私を変えてくれたのです。

老人ホームに行き、最初に目にとまったのは、車いすに乗り、一人で窓の側から空を見上げていたおばあさんでした。私は気になり、勇気を出して、「ちよっとお話をしませんか。」

と声をかけました。するとおばあさんはとてもうれしそうな笑顔を私に向けてくれました。おばあさんは、私があなずく暇もない程、たくさんのお話をしてくれました。戦争の話、亡くなった夫の話、かわいい孫の話など。施設の人に、おばあさんは過度の記憶障害であると聞きましたが、大切な人のことは鮮明に覚えており、思い出を自分の胸の中にちゃんとしまいこんで、忘れないようにと、鍵を閉めているのだらうと思いました。お話の最後に、私は考えてきていた質問をしました。

「何か望みはありますか。」
おばあさんは即座に

「健康になりたい。それだけでいい。」
と答えました。私は涙をこらえました。今、私が健康に生きていくこと、それがおばあさんにとっては何らやましいことなのだと感じました。別れ際に、おばあさんのしわくちゃの温かい手を握って、強く強く生きてやる、と心に誓いました。

後日、先生が、おばあさんは私が帰った後、泣きながら、また窓の側で空を見上げながら、私のことを話していたと施設の人から聞いた、と教えてくれました。とても胸が苦しく、温かいものが体中に広がりました。空の上にはだれがいるのか、何があるのか、おばあさんにしかわからないことです。

「佳作」

「十分間のゆとり」

宮崎 まはる（愛媛県 高校生）

ある日の朝、私は急いで学校に向かっていた。待ち時間の長い信号に引っかけ焦っていた私は、思い切りペダルを踏み込んだ。その瞬間、自転車のチェーンが外れ、自転車は言うことをきかなくなってしまった。通りかかった女性に「この辺りに自転車屋さんがありますか。」と尋ねたが、早朝であり、まだ開店前だということだった。するとその女性は「直るかな。」と言ってしゃがみ、チェーンに手をかけた。手入れの行き届いていないチェーンは真つ黒で、女性の手もみるうちに汚れてしまった。それでも、女性は気に留めることもなく、作業を続けた。十分も経たないうちに自転車はもとどおり。私は、感謝と同時に申し訳ない気持ちでいっぱい、「すみません。」と繰り返した。「大丈夫。」と答える女性は嫌な顔一つしない。加えて、「学校に間に合う。」とこちらの心配までしてくれた。さつきまで、深い霧に包まれていたかのように暗い気持ちだったのが嘘のように私の心に太陽が顔を出した。もちろん自転車がもとどおりになって安心したというのもあるが、それ以上に

その女性の優しさが本当に嬉しかった。よく「困っている人を見かけたら助けましょう」と言われるが、それを実行できている人はどのくらいいるだろう。忙しい朝ならなおさらだ。私を助けてくれた女性が口にしていたのは、「急いでいないから」という言葉だ。人を助けるには、勇気や優しさも必要だが、時間のゆとりも必要だと感じた。それ以来、私は、朝に以前より十分早く家を出るようになり心掛けている。困っている人を見つけたときのための十分間だ。まだ、助けたことはないけれど、愛媛の「愛（支え合い）」が広がるように次は私が誰かを助ける番だ。そう決めてから、持ち物の一つに「十分間のゆとり」が加わった。

「佳作」

音楽で人と人が「繋がる」とき

竹下 陽菜（愛媛県 中学生）

「それでは、一ヶ月休んで様子を見てみましょう。」医者からそう告げられた。私は、吹奏楽部に所属しており、ユーフォニアムという金管楽器を担当している。通称ユーフォと呼ばれるこの楽器は知名度が低く、人数も少ないがとても楽しい。今年で六年目になる。私はユーフォを吹くことを大切な生きがいにしてきた。毎日ユーフォを吹くのが本当に好きだった。そんなある日に告げられてしまった。去年の春のことだった。

私は幼い頃から、「アトピー性皮膚炎」という皮膚の病気を持っている。暑さや乾燥で一年中どこかがかゆくて痛い。それでも薬を塗ったり飲んだりして過ごしてきた。しかし中学一年の冬に今まで出なかった唇に症状が出始めた。最初は気にしていなかったが、日を重ねるごとにどんどん唇が裂けるように切れ、最大で二十六箇所にも及んだ。金属アレルギーの可能性があると思われる。悪化を防ぐ為に部活動を休止すると言われた。生きがい失われた日だった。例えば楽器に口をつけるのが痛くても、笑うだ

けで唇が切れても吹きたかった。言いようのない悲しさと悔しさが私を襲った。たった一ヶ月がとても長かった。それでも部活は休まなかった。吹けなくても聴ける。みんなの音を聴くチャンスだと捉えることにした。すると、

「私のパートの音、聞いてほしいんやけど。」

などと頼まれることが増えた。吹けない吹奏楽部員にも出来ることがあると気付いた瞬間だった。音楽で人と人が繋がると愛顔が生まれる。次第に唇も良くなっていく。二つの喜びが私に希望をくれた。宣告を受け本気で退部を考えた日。一層のことマネージャーになろうかと考えた日。全部馬鹿らしくなった。

現在私は、吹奏楽部副部長兼パートリーダーを務めている。病気は治っていないが無理をしないよう気をつけながら続けている。目標は夏のコンクール金賞代表。その夢に向かって今日もみんなと音を「繋いで」いる。

弟が教えてくれたこと

升澤 風香（愛媛県 高校生）

私が小学一年生、弟が一歳のとき、弟に骨髄性白血病という血液の癌が見つかりました。あれから約九年が経ちますが、弟の一年の闘病生活は今でも忘れられません。九年前、弟に癌が見つかる前、母と弟はすぐに入院しました。私と妹は、何の説明もなく母と弟に会えなくなりました。両親は、私達に心配をかけないよう、弟の病気については詳しく話ませんでした。私と妹が、母に会えるのは、父が母と、弟につくことを交代できる月に一回程度でした。久しぶりに会う、母の優しい笑顔と、病院の匂いが少しついた香りは今でもしっかりと覚えています。

弟は、病気が進行し、移植をしなければ、余命一ヶ月でした。しかし、奇跡的に妹と型が合い、妹がドナーとして移植することになりました。妹は、お尻に穴をあけ、苦しみながらも、弟を命がけで助けてくれました。移植は成功し、弟は、癌を完治しました。もう一度、家族みんなですぐに普通に生活できることの幸せ、大切さを感じました。

それから、何年か経ち、弟にてんかんという病気が新し

く見つかりました。弟はみんなよりも知的に遅れがありますが、怒ると急にあばれたり、人と普通にコミュニケーションがとれなかつたりと、弟が嫌になることも、数えきれないくらいたくさんあります。でも、穏やかで癒される笑顔、何事も全く深く考えていないところ、弟のこういう所に、自然と笑顔がこぼれ、家族みんな癒されています。

私の家族は、他の家族より苦しいこと、辛いことを経験してきました。けれど、この経験があったからこそ、家族一人一人の大切さ、支えあうことの大切さを学べたのだと思っています。あたりまえのことがあたりまえじゃないとわかったから、前よりも笑顔が増えました。あの、辛い経験のりこえられた、私たち家族なら、この先も、みんなですぐに普通に生活できることを思います。

「佳作」

今でも大切な人

奥迫 明梨（愛媛県 高校生）

七月十三日は私の祖父の命日でした。亡くなったのは私が七歳のときです。普段も定期的にお供えものをかえたり掃除をしたりしていましたが、その日は、家族の話題がなんとなく祖父のことになりました。

「あかりは大のおじいちゃん子だったし、おじいちゃんが助けてくれなかったら、あかりは今ここにいなかっただろうね。」

と母が言いました。私は驚きました。私が、おじいちゃん子だったのは知っていました。本当に小さいとき、母と祖父の両方が私を呼ぶと、必ずとっていいぐらい祖父の方へ行つたと、いろんな人からよく言われていたからです。それに、祖父と一緒によく散歩に行ったり、祖父がプレゼントしてくれた自転車に乗って遊びに行ったりしたことをまだ覚えています。でも、もしかしたら私がいなかったかもしれないというのは初めて聞きました。話を聞いてみると、私が生まれてしばらくして芸予地震が起こり、ベッドの上で眠っていた私を、祖父が連れ出してくれたそうです。

揺れが収まり家に帰ってみると私が眠っていたところには大きな棚が倒れていて、母はものすごく祖父に感謝したのを覚えていると言っていました。

祖父はよく母にこう言っていたそうです。

「この子は将来、どんな国にいて、どんな人に対してでも困っていたらほっとけない、やさしい子になるだろうね。」

でも母は「過大評価すぎ」と信じていませんが。

私は将来どんな職業に就きたいかまだ決まっています。でも、祖父が助けてくれた命を大切にして、祖父が言ったような人になりたいと思っています。

「ほら、言った通りだっただろ。」

と祖父が笑顔で自慢できるように。

広告

エネルギーを
もらったのは、
クルマだけじゃ
なかったみたい。



この星と人のチカラに。

SOLA TO

太陽電池株式会社 <http://www.taiyool.co/>



広告



DCM DAIKI

DCMダイキ株式会社

〒791-8517 愛媛県松山市美沢1-9-1

電話(089)925-1111(代)

<http://www.daiki-grp.co.jp>

広告

明屋書店 HARUYA 明屋書店MEGA平田店 リニューアル
2017年 2月3日(金) **OPEN**



nota nova (ノータ・ノーヴァ) stationery

「nota nova」の商品構成は幅広く、文具については高級万年筆から定番の実用文具、学童文具、ファンシー文具までフルラインを取り扱います。

愛媛県松山市平田町81-1
☎ 089-978-0600
10:00~22:00
年中無休



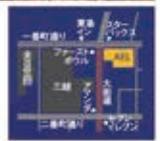
SerenDip 明屋書店 アエル店

お客様の興味や暮らしを提案



松山初上陸!
おとなディズニー
明屋書店
HARUYA
www.haruya.co.jp

愛媛県松山市大街道2-5-12
アエル松山 2F
☎ 089-941-4242
10:00~22:00 (年中無休)



広告

まちにいいトコ、
ずっといいコト。



おかげさまで、50サイ



Fuji

本 部 / 松山市宮西一丁目2番1号
TEL (089)926-7111(代表)

(株)フジは、えひめ国体の
オフィシャルスポンサーです。

「写真部門」

知事賞

“青空高く
夢馳せて…”

鈴木 緑 (埼玉県)

「あのピンクの鯉が私」「緑のがボク」
肩を寄せ笑い合う姉弟。撮影する
私も笑顔。ずっと眺めていたいなあ。



白川義員特別賞

“仲良し家族…”

鈴木 文代 (和歌山県)

本州最南端潮岬望楼の芝で、仲良し
家族四人、最高の笑顔を見せて
くれました。この笑顔、いつまでも…



河原学園賞

“両手に花!?”

大野 久子 (神奈川県)

保育園の息子とお友達で賑やか撮影会。
楽しい思い出が増えました。



優 秀 賞

“ 発表！わたしたちの 今年の目標 ”

橋本 直子（兵庫県）

3きょうだいそれぞれ今年の目標を筆で書きました。今年の終わりにまでに達成できるかな？



“ えがお満開 ”

二川 美香（愛媛県）

満開の桜のもと、家族でお花見に行きました。娘は花より団子。お父さんに肩車されてご満悦です。



“ あなたと私は 101歳差だよ ”

川那 賀一（岐阜県）

「あなたと私は101歳差だよ」と笑うひいひいおばあちゃん。その愛顔の価値にいつか娘は気づくでしょう。



入 選



“シャボン玉王子”

何 ゆり（東京都）

シャボン玉が大好きです。いつも会心の笑顔で遊んでいます。



“迷コンビ”

梶野 充義（愛媛県）

5年前に撮ったお気に入りの同じ場所、いつも元気の迷コンビ。これからも愛犬と青春を駆け巡るだろう。



“まいったね！”

雪本 信彰（高知県）

新居浜太鼓まつりでの一コマです。



“おねえちゃんになりたいな”

今井 真紀（沖縄県）

元気な赤ちゃんが産まれますように。。一緒にお祈りしてくれる娘です。優しい笑顔だね^-^



“赤ちゃんも同級生”

後藤 有季（熊本県）

幼稚園からの大事な友達。お腹の子も同級生になるね。お母さん達みたいに仲良くなってくれるといいな。

知事賞

“サンフローズマイル”

呉 真凜（山梨県）

向日葵畑での写真です。向日葵にも負けないぐらい元気をもたらえる笑顔です。



白川義貞特別賞

“友だちと”

宇都宮 伽奈（愛媛県）

一緒に愛顔。



河原学園賞

“勝負の楽しみ”

片倉 豪太（神奈川県）

真剣勝負の合間の一瞬の笑顔を撮りました。



知事賞

“ 未来の
お天気お姉さん ”

渡部 葉月 (愛媛県)

お天気お姉さんを体験できて、とても楽しかった。将来は、本物になれたらいいな。



白川義貞特別賞

“ なつ! ”

田中 康誠 (愛媛県)

暑いのもいいね。



河原学園賞

“ やっ! ”

平川 明果 (愛媛県)

みんなと最初の演奏会



知事賞

“おはよう！”

後藤 堪太（熊本県）

朝からひいじいちゃんとおしゃべりをして、大喜びの弟です。



白川義貞特別賞

“あなたが笑えば
わたしも笑う”

細井 智弘（愛知県）

泣いて笑って寄り添って 笑顔で毎日過ごせる事が家族の幸せです。



河原学園賞

“おすしが
回ってるよ～！”

窪田 宜久（愛媛県）

おすしが回ってるのを初めて見た
おとうとが大ばくしょう！何がおもしろいのかなあ～？



各賞

愛媛広告協会賞



“花笑み”

鈴木 俊樹 (埼玉県)

母の日に娘が作った お日様色の花冠。二人そろって「ありがとう」と笑っていました。

愛媛県商工会議所連合会賞



“視界がひろ～くなりました☆”

岩井 佳菜子 (愛媛県)

笑顔の先には大好きなおじいちゃん、おばあちゃん♡

愛媛経済同友会賞



“野菜持っていくかね？”

袴田 健太 (静岡県)

畑で仕事をしていたお婆さんに挨拶をしたら、こんな返事が来たのでビックリしてしまいました。

愛媛県IT推進協会賞



“綱引きで笑顔を！”

柴田 龍也 (神奈川県)

体育祭での1枚です。真剣勝負の中でも笑顔やめない彼に勝利を！

愛媛県歯科医師会賞



“みんなでポーズ！”

友澤 翔英 (愛媛県)

大洲の宿泊研修のウォークラリーで、のどかな景色をバックに自撮りにチャレンジ。笑顔あふれる1枚です。

愛媛県美容生活衛生同業組合賞



“仲良し”

染次 佑奈 (愛媛県)

ずっと仲良しなみんなであってほしい。

愛媛県獣医師会賞



“夏の始まり”

橋本 さゆき (兵庫県)

弟が笑うと妹も笑う。わたしもみんなも笑顔になります。

愛媛県情報サービス産業協議会賞



“愛顔満開”

安永 虹 (愛媛県)

楽しみにしていた海水浴！満開の愛顔とともに夏が開幕しました。

「一般の部」

「高校生の部」

「中学生の部」

「小学生の部」

審査委員紹介



新井 満
(審査委員長)

1946年新潟県生まれ。作家、作詞作曲家、写真家など多方面で活躍。1988年、『尋ね人の時間』で第99回芥川賞受賞。2005年、『この街で』（作詞：新井満、作曲：新井満、三宮麻由子）を制作。

2007年、『千の風になって』で第49回日本レコード大賞作曲賞を受賞。2014年、正岡子規の俳句にメロディをつけ、松山市民の愛唱歌「春や昔」を制作。子どもから大人まで松山市民に愛される曲となる。



神野 紗希
(審査委員)

1983年愛媛県松山市生まれ。2001年、松山東高等学校時代に第四回俳句甲子園にて団体優勝、「カンパスの余白八月十五日」が最優秀句に選ばれる。2004年、第一回芝不器男俳句新人賞坪内稔典奨励賞を受賞。2006年から、6年間、NHK『俳句王国』司会を担当。現在、明治大学・玉川大学講師。



白川 義員
(特別審査員)

1935年愛媛県四国中央市生まれ。ニッポン放送、フジテレビを経て、1962年フリー写真家。1993年に南極大陸一周に成功（史上初）。

1996年から「世界百名山」撮影プロジェクトを開始、作品集「世界百名山」を出版。

2002年、国連が「国際山岳年」を記念して、作品集「世界百名山」の中から12作品を選んだ記念切手を発行。

記念切手12種類全点を1作家で制作したのはフェルメール、ダリ、ピカソなどに続いて世界で11人目、写真では初。

2012年11月、作品集「永遠の日本」発表。

1972年、第13回毎日芸術賞

1972年芸術選奨文部大臣賞

1988年、第36回菊池寛賞

1995年、第27回日本芸術大賞

※上記日本を代表する芸術4賞総てを受賞したのは、文学、美術、音楽等総ての表現分野を通して白川義員ただ一人。

このほかにも、1981年、全米写真家協会最高写真家賞（史上10人目）を受賞するなど世界を代表する写真家。



中村 時広
(審査委員)

1960年愛媛県松山市生まれ。1982年三菱商事株式会社入社。1987年愛媛県議会議員。1993年衆議院議員。1999年愛媛県松山市長。連続3期当選。2010年愛媛県知事。2014年再選、現在2期目。

子どもたちの未来のために、 伝えたい想いがあります。

JAバンクえひめでは、食と農業に対する学習や農業体験などを
はじめとした様々なCSR活動を通じて、
自然と調和・共生できる循環型社会の実現をめざし、
地域の皆様の豊かな未来の実現に取り組んでいます。

JAバンクえひめキャラクター
ばんじゃくん



JAバンクえひめ

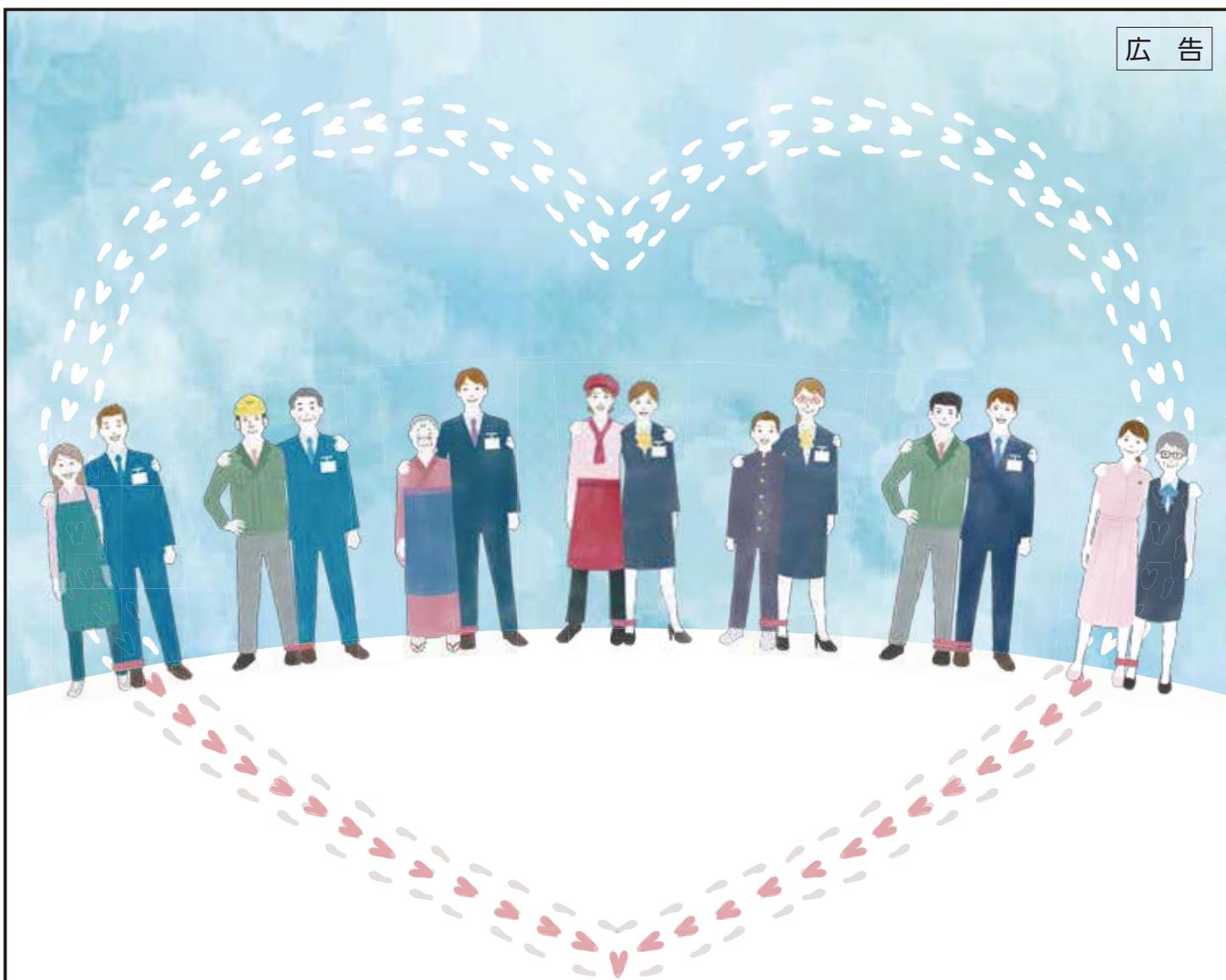
JA うま	JA 新居浜市	JA 西条
JA 周桑	JA おちいまばり	JA 今治立花
JA 松山市	JA えひめ中央	JA 愛媛たいき
JA にしうわ	JA ひがしうわ	JA えひめ南
		JA 愛媛県信連

 **JAバンク えひめ**
(愛媛県下JA / 県信連)

「JAバンクえひめ」は、愛媛県下12JAと県信連の総称です。

JAバンクえひめ

検索



愛媛に根ざす、
信用金庫として。
愛ある人と。
愛ある地域と。
歩んでゆきたい、
未来があります。

あなたの
笑顔と一緒に

「愛」ある街のホームドクター

 愛媛信用金庫



「エピソード」部門の知事賞・特別賞受賞作品については、水樹奈々さんの朗読に田村祐子さんのサウンドアートアニメーションを合わせた動画作品をインターネットで配信しています。

愛顔感動ものがたり

検索



印刷 株式会社美統

発行 愛媛県
企画振興部地域振興局
文化・スポーツ振興課
〒七九〇一八五七〇
愛媛県松山市一番町四丁目四一三
TEL(〇八九) 九二二一・二九七二

平成二十九年二月発行

「感動のエピソード」
& 「愛顔の写真」
愛顔感動ものがたり

